

# MACROCOSM

国際交流事後活動ニュース

## CONTENTS

- 2 第19回「世界青年の船」事業
- 6 第5回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」
- 11 第1回「国際交流リーダー養成セミナー」
- 17 日本青年国際交流機構会長挨拶
- 18 青少年国際交流事業事後活動推進全国代表者会議
- 20 平成18年度「青少年国際交流を考える集い」(ブロック大会)
- 22 お知らせ

2007.5 vol.76

マクロコズム

(財) 青少年国際交流推進センター

## 第19回「世界青年の船」事業

# The 19th Ship for World Youth Program

「世界青年の船」事業は、日本と世界各国の青年が船内で生活を共にし、船内及び訪問国において、世界的視点に立った共通の課題の研究・討論を行うなど各種の多国間交流活動を行う中で、日本の青年の国際的視野を広げ、日本及び諸外国の青年相互の理解と友好を促進し、併せてその国際協調の精神と実践力を向上させ、もって国際社会の各分野で指導性を発揮できる青年を育成することを目的としています。

第19回目の本事業は、日本青年117名と、オーストラリア、カナダ、チリ、エジプト、フィジー、メキシコ、オマーン、ロシア、セーシェル、ソロモン諸島、トンガ、英国、イエメンから135名の青年が参加して実施されました。参加青年は、平成19年1月から3月にかけて、「**AHOY! ~ Achieving the Hopes Of Youth ~**」のスローガンを掲げ、約50日間にわたり、日本国内、船内及び各訪問国での交流活動を行いました。

### プログラム

1/16	外国参加青年来日
1/17～1/24	日本国内プログラム 都内視察、課題別視察 地方プログラム(岩手県、静岡県、三重県、愛媛県、高知県、宮崎県)、出航前研修
1/25	横浜(日本)出航
2/5～2/8	ブリスベン(オーストラリア)
2/12～2/14	シドニー(オーストラリア)
2/19～2/21	ウェリントン(ニュージーランド)
3/8	東京(日本)帰港 外国参加青年離日

### 船内活動



参加青年が主体的に企画・運営をする「PY(参加青年)セミナー&ワークショップ・デー」でカナダの青年が「人権」についてのセミナーを開催

### 訪問国活動

#### ブリスベン(オーストラリア)



コース別活動: Musgrave Park Cultural Center で参加青年がオーストラリアの先住民の文化について学ぶ(異文化理解コース)

#### コース別活動:

Northey Street City Farm で参加青年が持続可能な社会作りをテーマに「パーマカルチャー」について学ぶ(コミュニティとライフスタイルコース)

\*「パーマカルチャー」とは「パーマネント(持続的・永久の)」「アグリカルチャー(農業)」「カルチャー(文化)」を合わせた言葉で「持続可能な農的生活のデザイン」と訳されることがある。





クラブ活動で日本青年が和太鼓を教える



グループ活動で習字を体験



各国の文化紹介(ナショナル・プレゼンテーション)でロシアが華麗な踊りを披露

### シドニー(オーストラリア)



社会情勢の影響で急な訪問国の変更があったため、シドニーにおける活動の企画・運営はオーストラリアの事後活動組織の全面的な協力を得て行われた

### ウェリントン(ニュージーランド)



Wellington Institution of Technology を訪問し、学校の施設を見学



不登校や精神的な問題などを抱えた青少年を対象に活動する非営利団体 Inspire Foundation を訪問しスタッフと意見交換をする

Cardinal McKeefry Schoolを訪問、生徒に「世界青年の船」事業について説明をする



## コース・ディスカッション

「世界青年の船」事業では、船内活動の中心的なプログラムとして「コース・ディスカッション」を行っています。「コミュニティとライフスタイル」、「教育」、「情報メディア」、「異文化理解」、「ボランティア」、「青少年育成」の6つのコースにおいて「青年の社会参加」を共通テーマにディスカッションを行い、参加青年の各分野についての知識及びそれらの分野において、青年が果たすべき社会的役割について認識を深めるとともに、実践力の向上を図りました。

「青年の社会参加」をテーマとした各国の青年活動の紹介を「全体導入フォーラム」で行った後、各コースにわかれ、指導官とファシリテーターの指導のもと、テーマ別のディスカッションを進めていきました。また、

船内でのコース・ディスカッションに加えて、ブリスベンとウェリントンでは、コース・ディスカッションごとにコースの内容に沿った施設訪問が行われ、各国における実情を認識することにより、更に深いグループ・ディスカッションにつなげました。

事業の終盤には、コース・ディスカッションの成果報告の場として「サマリー・フォーラム」が開催されました。ここでは各コース20分のプレゼンテーションを行うとともに、コース・ディスカッション運営委員が考えた実践的なワークショップを行うことで、参加青年がプログラムを通じて学んだことを全員で共有しました。



指導官によるメディア・リテラシーについての講義を受け、メディア・リテラシーへの理解を深めるとともに、市民社会とメディアとの関わりを理解する（情報メディアコース）



各国が抱える教育課題の解決策を図る（教育コース）



文化と文化が出合う時、何が起これるかを理解するためにシミュレーション・ワークショップを行う（異文化理解コース）

「持続可能な社会と自分」をテーマに、持続可能な社会に関するそれぞれの見方を共有し、活動を効果的にし、持続させるための方法を探る（コミュニティとライフスタイルコース）





共に働き、グローバルな協力を実現するための小グループ活動として「貿易ゲーム」を行う（青少年育成コース）



各国でボランティアを強化し促進するための「ボランティア憲章」を作り、サマリー・フォーラムで発表（ボランティアコース）

## 第19回 「世界青年の船」事業 参加青年 三代康平



船を降り二週間半。すでに遠く感じる経験や思い出ばかりです。多くの笑顔や優しさ、そして希望に囲まれて生活した夢のような時間は過ぎたのだと少しずつ実感するよ

うになりました。

「世界青年の船」事業に参加し私が感じたこと、それは「知る」大切さと「伝わる」喜び、そして人と人との繋がりです。参加以前も様々な交流活動に関わってきましたが、私は自分にとって何が大切で伝えたいことなのか分からず、満足もできず、不安になり、本当に楽しめているのだろうかという疑問をもつことが大半でした。人間関係においても距離を置き、自己表現を避け、傍観する自分がありました。しかし、船の中では徐々に素直に人の話を受け入れ、自身を表現できるようになり、弱いところは友人に助けられ、支え合う関係を築くなか、絆を感じました。

船内プログラムの中心であるコース・ディスカッションからも大切なことを学びました。「コミュニティとライフスタイル」コースでは環境と経済の2分野を支点に、持続可能な社会、また、人の幸せとは何かについて議論し、寄港地での施設訪問や、意見、知識、問題等を交わすなか、私はできるだけ多くを理解し、伝えようと努力しました。そして議論を深めていくうちに、環境問題の改善には相互理解や共有した認識が大切なのだを知り、より一層、世界の繋がりを感じたのです。

もちろんほかでも、船にいた多くの瞬間から私はたくさんのことを感じました。夢も希望も人それぞれ。感じたことも思い出も人それぞれ。しかし、同じ空間で生活する私たちの感動は、言語、宗教、文化を超えて伝わり、共有できるのだと様々な体験を通し気付かされました。たくさんの希望をのせた「にっぽん丸」は確実に私たちを前進させ、大きく広がる空と海は私たちの心と視野を少し広げてくれた気がします。「世界青年の船」事業の43日間から私はたくさんのことを教わりました。これからが本当の始まりだと感じる今、私は船で築けたつながりを大切に、たくさんの感動を伝え続け、いつかは人々を繋ぐ架け橋になりたいと思います。

## 第5回 青年社会活動コアリーダー育成プログラム

平成14年度に開始された青年社会活動コアリーダー育成プログラム（以下コアリーダー事業）は今年度で第5回目を迎えました。その目的として、(1)社会活動の青年コアリーダーの能力の向上、(2)相互のネットワークの形成を掲げています。この目的を達成するため、高齢者・障害者・青少年分野で活動している青年コアリーダーを各国から招へいし、日本の関係機関・関係者とのネットワーク作りを事業のねらいとしています。

2006年 10月25日～ 11月3日	派遣事業(各国6名ずつ)(写真1) ・派遣国：デンマーク(高齢者)、ベルギー(障害者)、ニュージーランド(青少年) ・招へい青年を受け入れる府県からの派遣者は、実行委員として受入れに協力
2007年 2月6日	招へい青年来日 ・招へい国(分野混在)デンマーク(13人)、ベルギー(10人)、ニュージーランド(13人)
2月7日	開会式・オリエンテーション・行政官講話・歓迎会(写真2) ・日本のNPOの状況及び各分野の現状について行政官による講義を実施
2月8日	課題別視察(写真3) ・各テーマの専門施設を訪問し、実際の現場を視察及び関係者との意見交換を実施 <b>【地域・行政・企業との連携・協力コース】</b> AM: NPO法人小貝川プロジェクト21 / 小貝川生き生きクラブ PM: 彩の国市民活動サポートセンター <b>【資金調達・団体運営コース】</b> AM: NPO法人小貝川プロジェクト21 / 小貝川生き生きクラブ PM: 財団法人「修養団」 <b>【人材育成・ボランティアマネジメントコース】</b> AM: 常磐線NPOプラットフォーム / NPO法人NPO支援センターちば PM: NPO法人「ばれっと」 <b>【NPO・他分野とのネットワークコース】</b> AM: 常磐線NPOプラットフォーム / NPO法人NPO支援センターちば PM: NPO法人「流山ユー・アイネット」
2月9日～ 11日	NPOフォーラム(写真4・5) ・日本の各分野のNPO団体関係者と共にコアリーダーの育成及びNPOの活性化について討議を実施
2月12日	地方プログラムオリエンテーション
2月13日～ 18日	地方プログラム(写真6・7・8) ・各コースに分かれての地方プログラム。コーステーマに沿ったプログラムを企画。関連施設を訪問し、NPO及び分野の関係者と共に地方セミナーを実施 <b>【高齢者コース】</b> 福井県：生きがいのある高齢者の生活 <b>【障害者コース】</b> 山口県：障害者の社会参加のための支援 <b>【青少年コース】</b> 大阪府：青少年リーダーの育成～持続的な活動を目指して
2月19日	コース発表会・評価会・歓送会(写真9)
2月20日	帰国



▲ 写真1. デンマーク



▲ 写真2. 行政官講話



▲ 写真3. 課題別視察



▲ 写真4. NPOフォーラム (グループ討議)



▲ 写真5. NPOフォーラム (文化紹介)



▲ 写真6. 福井県



▲ 写真7. 山口県



▲ 写真9. 青少年コースの発表



◀ 写真8. 大阪府

////// 高齢者関連活動コース<福井県> ////

事業事後報告からの学び

第5回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」  
派遣プログラム(デンマーク)参加青年  
白崎 智恵

昨年10～11月にデンマークを訪問し、現地において“高齢者福祉の3原則”として掲げている「自己決定」「生活の継続性」「自己能力の活用」が、机上だけの学びではなく実際に取り組まれていることに強い感動を覚えながらの帰国。一方で帰国後、周りの現状を見た時のリアリティショックはかなり強いものでした。何かが違う…？自分が感じたことを伝えたいという思いもあり、いくつかの場で事後報告の機会をいただいています。そして、いくつかの報告を終えた今、感じていることをお伝えします。

(1) 自分自身の勤める医療現場(院内)での報告

デンマークにおける福祉の現状に加え、医療現場に何が求められているのか。私自身が強く感じた「リハビリ」部門の充実・社会福祉機関との有効な連携・活用の重要性について重点的に報告しました。職業的にも興味・関心は高く、医療現場が担う役割を共に再認識できたと感じています。

(2) 地方(福井県・市)公務員労働組合青年部を対象にしたの報告

福祉労働現場の実際に加え、私が職員と関わる中で感じられた“ゆとりある、誇らしげな(責任ある)姿勢”について重点的に報告し、超高齢化社会を迎えようとしている今、自分たちの世代に求められることは何なのか？などを話し合いました。対象者の職種は様々でしたが、高齢者福祉に関する情報には想像以上にとても強い興味・関心が示されました。勉強会後の交流会でも、多くの意見交換が行われました。

(3) IB医療福祉専門学校での報告(招へいプログラムでの訪問先)

招へいプログラムの受入先でもあり、プログラム案を考慮する上でも何かの情報にでもなれば…といった思いから、専門学校の先生方や学生を対象にした事後報告の時間をいただきました。当日は、デンマークの福祉に関する具体的な質問



が出るなど事前学習した様子うかがえ、熱心な姿勢が感じられました。しかし、現地で私が見たこと、感じたことなどの全体的な報告であったこともあり、先生方や学生さんたちが、どのようなことに興味があるのか？何を知りたいのか？についてがその場では具体的にはわからないままに終わりました。そのため、その後、数日かけて先生方との話し合いをもちました。その結果、現地で私自身が確認できなかった、介護職の教育課程や地位確立の現状について、また介護職の抱える悩みについて話し合いたいといった声があがり、外国青年とのディスカッションテーマ・目的が明確になりました。

招へいプログラムでの外国参加者訪問当日。ディスカッションの場では、先生方のご協力もあり、卒業後、介護職に就いている方も参加され、現場で抱えている悩みや問題点など、それぞれが意見や質問をもって臨む積極的な姿勢が多くみられました。学生たちは真剣で、今後の意気込みや不安などを涙ながらに語る学生もいて、感動を覚えるほどでした。

以上のように、参加対象が変わることで報告・話し合いの内容は幾分変わりましたが、どの場においても共有できる課題が見つかり、その出会いから始まったネットワークは、私にとって貴重な財産となっています。デンマークでの時間を共に過ごした派遣メンバーを始め、事後活動等を通して知りあった方々との出逢いに感謝し、今後もネットワークを広げたいと強く願っています。

日程	プログラム
2月13日(火)	福井県高齢者福祉政策に関する講義・歓迎会
2月14日(水)	福井市麻生津公民館・福井県副知事表敬
2月15日(木)	特別養護老人ホーム藤島園
2月16日(金)	IB医療福祉専門学校・地方セミナー・歓送会
2月17日(土)	ホームステイ



## 障害者関連活動コース<山口県>

### 青年社会活動コアリーダー育成プログラム受入事業から学んだこと

山口県青年国際交流機構 事務局長  
受入実行委員長 西村 律子

山口県プログラムでのテーマや内容については、障害者福祉の分野に携わるメンバーを中心に「自分たちが何を学びたいか」ということに焦点を合わせて話し合いました。このプログラムに関しては、受入側の学びを重視し、外国参加者からの意見や感想を今後の山口県での福祉活動に活かしたい、という方向で進めることを全員で確認すると、プログラム作りもスムーズに進み始めました。

全体テーマ「障害者の社会参加のための支援」のもと、山口県での重点テーマは「地域社会との関わり」、「生きがいくくり」、「就労」の3点に絞ることにしました。テーマに合わせて選んだ訪問施設「なでしこ園」、NPO法人「アス・ライフサポート」、社会福祉法人「南風荘」では、職員の皆様が非常に協力的であり、施設訪問プログラムについて熱心に検討してくださいました。いろいろな職種の方々に参加していただくディスカッションを各施設で組み入れることができ、各施設の皆様にとっては、日本以外の国での考え方や現状などを直接聞くことのできる、またとない機会になったのではないかと思います。

地方セミナーについては、全体を大きく、①各国の福祉事情についてのプレゼンテーション、②少人数グループでディスカッションを行う分科会の2本立てとしました。実行委員会メンバーが山口県の状況についてのプレゼンを行うために、アンケート調査を行ったり、他施設の職員さんに取組事例を紹介していただくようお願いしたりと、準備には大変な時間を費やしましたが、その甲斐もあり、満足のいく内容になっ



たようです。また、セミナーには県内のさまざまな施設から、たくさんの福祉関係者の方々が参加していただき、分科会では活発な意見交換ができました。

今回、山口県での「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」の受入れは、結果的に、これまででない大きな成果を残した事業になったと思います。私のようにこれまで福祉に関わったことのない者も、普段の生活の中で私たちにも関係のある多くのことを学びましたし、どのような分野にも国際的な視点やネットワークが必要なのだということを実感しました。また地域内においても、他分野、他業種、他世代の方との、新しいネットワークが広がったと思います。これからの私たちの国際交流活動は、単なる「交流」ではなく、多岐にわたる分野の方々との協働によって、より広く求められるものになると感じています。



日程	プログラム
2月13日(火)	県庁表敬・県政概要・歓迎会
2月14日(水)	社会福祉法人「済生会」身体障害者療護施設「なでしこ園」 NPO法人「アス・ライフ・サポート」
2月15日(木)	社会福祉法人「南風荘」社会就労センター「セルフ岡の辻」
2月16日(金)	地方セミナー・ホームステイ
2月17日(土)	ホームステイ・歓送会

////////// 青少年関連活動コース<大阪府> //////////

外国参加者からのコメント

ニュージーランド団長 Suzanne Fryer

How do I describe our two weeks experience in Japan at the NPO Forum? Hard work, fun, talking, eating, sharing, new friendships, networking, creating ties that bind our four countries, Japan, Denmark, Belgium and New Zealand.

I am sure that none of the overseas visitors really had a firm concept of what would happen at the program before our arrival. We each had knowledge of NPO's in our own countries and were surprised that in Japan, the sector is so young. During discussions therefore, we had much to share with our Japanese colleagues based on our own practice and were often seen as experts. The challenge of course now, is to integrate the relevant knowledge into the Japanese system and culture...with the aim of moving closer to an inclusive and cohesive society where "individuals actively participate in and contribute their skills to the community." The level of dedication and commitment shown by our hosts towards their respective NPO's and the people they assist is to be admired.

Personally these discussions encouraged me to reflect on both my own, and my organisations practice particularly in fund-raising and management. Gathering fresh ideas from around the world has given me new insights that I am determined to incorporate and share. Meeting and staying with a host family in Osaka has given me a warm appreciation of the hospitality and vitality of the Japanese people. The local programme reiterated the commitment of so many people, particularly volunteers, to better the life of those around them who need care.

Where to from here? We each need time to consolidate and reflect on our experience, however communication, encouragement and sharing ideas will continue through websites and email. Further visits between Japan and the three visiting countries would enhance and add value to our discussions and we warmly welcome you all.

日本での2週間にわたるNPOフォーラムでの経験については何と云えばよいでしょうか?よくがんばった、楽しかった、話した、食べた、共有した、新しい友情、ネットワーク構築、そして、日本、デンマーク、ベルギー、ニュージーランドという4つの国を結ぶ絆づくり。

外国参加者の中で、来日前にこのプログラムで何が起こるのか具体的なイメージを持っていた人は誰もいなかったでしょう。それぞれの国のNPOに関する知識を持って集まった私たちは、まず日本のNPOセクターの歴史が浅いことに驚きました。そのため、ディスカッションプログラムでは私たち自身の実際の業務運営手法に関して日本人参加者と共有できる知識・情報も多く、私たちが各分野の専門家として見なされることがよくありました。もちろんこれからの課題は、このような知識を日本のシステムと文化に取り入れていくことであり、それを通じて自分たちの社会を「個人が積極的にコミュニティに参加し、自らのスキルを使ってコミュニティに貢献する」インクルーシブな共生社会により近づけていくことでしょう。また、本プログラムの主催者が、NPOやその支援対象者に向けて示す強い献身とコミットメントは称賛に値するものでした。

一連のディスカッションは私自身、また私が属する組織の、特に資金調達とマネジメント分野における業務運営手法を振り返るきっかけとなりました。世界の国々から新鮮なアイデアを集めることで得た新たな見識をぜひとも自分の活動に取り入れ、関係者と共有していきたいと思えます。また、大阪府でのホストファミリーとの出会いとホームステイを通じて、日本人の温かいもてなしの心と活気に触れることができました。地方プログラムでは、多くの人々、特にボランティアの皆さんの「自分の周りにいる、助けを必要としている人の生活をより良いものにしたい」という献身的な思いを改めて感じました。

ここからどこに向かうのでしょうか?まず、参加者一人ひとりが自分の経験を振り返り、まとめる時間が必要です。しかし、その間もコミュニケーション、励まし、アイデアの共有はウェブサイトやメールを通じて進んでいきます。日本と参加3か国間の再訪なども実現できれば、今回のディスカッションで学んだ内容の理解を深め、価値を高めるよい機会となるでしょう。私たちの国にもぜひお越しください。



日程	プログラム
2月13日(火)	大阪府庁表敬・大阪府青少年事情説明・歓迎会
2月14日(水)	茨木市安威小学校「チャイルドサポート」教室
2月15日(木)	大阪府立総合青少年野外活動センター「HRT:人間関係構築プログラム」体験
2月16日(金)	地方セミナー・ホームステイ
2月17日(土)	ホームステイ・歓送会

第1回

「国際交流リーダー養成セミナー」

平成19年3月10日(土)～11(日)、(財)青少年国際交流推進センター主催の第1回「国際交流リーダー養成セミナー」がBumB東京スポーツ文化館にて実施されました。全国各地の国際交流員や学校教員など21名が参加し、異文化コミュニケーションの第一人者 John Condon博士(ニューメキシコ大学理事教授)と 榎本智子先生(神田外語大学国際コミュニケーション学科)の基調講演を聴講したあと、3つの分科会に分かれて実践的な手法を学びました。

スケジュール

3月10日 (土)	10:00-10:45	開講式・オリエンテーション
	10:45-11:15	参加者自己紹介(アイスブレイキング)
	11:15-12:45	基調講演「国際交流と異文化コミュニケーション」 John Condon 博士(ニューメキシコ大学理事教授) 榎本智子先生(神田外語大学国際コミュニケーション学科)
	13:45-17:15	分科会(A. 企画立案 B. ファシリテーション C. 異文化コミュニケーション)
	19:00-20:00	交流会
	20:00-21:45	グループ活動(グループ①、②、③)
3月11日 (日)	09:00-10:00	分科会(A. 企画立案 B. ファシリテーション C. 異文化コミュニケーション)
	10:15-12:00	グループ活動(グループ①、②、③)
	13:30-14:15	全体会(グループ発表/総評)
	14:15-14:50	振り返り(この研修での学び・気づき)

基調講演の概要

日本の百貨店は「文化の博物館」

Condon博士が初めて異文化に接したのは、メキシコシティにあるニューメキシコ大学に入学したときのことだった。当時、博士はスペイン語もスペインの文化も全く知らなかったが、大学で体験した異文化は大変楽しく、博士の世界への見方を大きく変える出来事だったという。

初来日は40年前。日本の百貨店が好きでよく出かけて行くが、日本の百貨店はまるで「文化の博物館」のように感じる。売り場に新しい机やランドセルが並びはじめると、新学期が近づいているのが分かる。日本の春のこの光景は、昔から変わることがない。

一方、変化したことといえば、赤ん坊を背負っている母親を見かけることが少なくなったことだろう。母親がお辞儀をすれば、背負われている赤ん坊もいっしょにお辞儀をし、母と子が密着しているゆえに、母親も子どもそれぞれの動きを逐一感じ、非常に密なコミュニケーションができていた。アメリカ



ジョン・コンドン博士と榎本智子先生による基調講演

では、子どもはたいていベビーカーに乗せられていて、母親とは距離をおいているのが通常である。

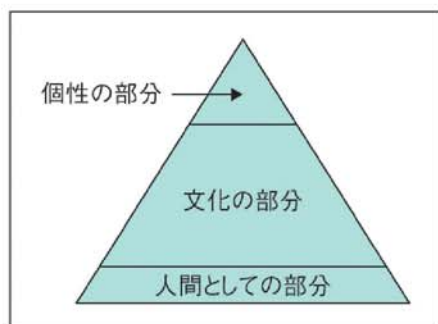
先日、男性用お手洗いに赤ん坊のオムツを換えるための台が設置されているのに気がついた。以前は、男性が子どものオムツを換えることなどめったにな

かったが、最近ではジェンダー（性別）の役割が変化しており、男性であってもこまめに赤ん坊の世話をする人が増えてきたためと思われる。

このように、時代と共にジェンダーの役割が変化し、それと共に人々の価値観、物事の見方も変わっていくことが読み取れる。

## 文化の定義

「文化」にはさまざまな定義があるが、右のピラミッドを定義として示したい。ピラミッドの底辺の部分は、人類共通の要素、



ピラミッドの先端の部分、つまり個性と呼ばれるところとすると、その中間にあたるところが「文化」と言える。

## トランプを使ったあいさつゲーム（榎本智子先生）

人はコミュニケーションをする際に、これまで無意識のうちに身に付けてきた文化的価値観で相手の社会的地位などを判断し、自分が取るべき態度を瞬時に判断している。



この点を明らかにするために、トランプを使ったあいさつゲームをしてみよう。トランプの数字が大きければ大きいほどそのカードの保持者の社会的地位が高い、というルールを設定する。「13」のカードを持っている人が一番偉く、「1」のカードの身分が一番下になる。

- ①各参加者はトランプを1枚引く。どのカードを選んだかは自分にはわからない。

- ②相手にのみ自分の数字が見えるようにカードを持つ。

- ③会場内を歩き回って、できるだけ大勢の人と一対一であいさつする。

参加者同士がしばらくあいさつをかわした後、「自分のカードが『8』より上の数字だと思う人は？」と尋ねたところ、20名中、4名が手を挙げた。なぜ、そう思ったのか理由を問うと、以下のような反応があった。

- ・相手の方が先に声をかけてきてくれるから
- ・相手が自分に深々とお辞儀をしてくれるから
- ・敬意を込めてあいさつしてくれるが、自分の数字がいくつなのかわからないので、どの程度のあいさつを返せばよいのかわからず戸惑った



アイスブレイキング

「自分のカードの数字が『5』より小さいと思った人は？」との問いには、およそ半数が挙手した。その理由は、「5」前後のカードを持つ人と話したときの相手の反応を見て、自分のカードが「5」以下だと感じたとのことだった。

## 人を外見で判断する際の基準とは

人がコミュニケーションをする際、70%～90%は非言語メッセージによるものだという。「人は外見で相手を判断する」とよく言われるが、その基準は



いったい何なのだろうか。相手のおよその年齢、性別、有名企業の社章など明らかに肩書きが分かるものを身に付けているといった要素から相手の社会的地位を瞬時に判断し、相手に対して取る態度を変えているのが普通である。これまでに親から教えられたり学校などで学んだりしたこと、無意識のうちに学習してきた事柄によって、自分の価値観、自分のアイデンティティが形成されていると言える。それゆえ、異文化に接した際、自分の国、自分の文化圏では遭遇しなかったような反応に直面すると、強い違和感を覚える。

### 非言語コミュニケーションの分類

- ①対人空間
  - ②身体接触学
  - ③身体・動作表現（手や足の組み方など）
  - ④ジェスチャー
  - ⑤顔の表情（6つの基本的な表情は全世界共通）
  - ⑥視線接触学・アイコンタクト
  - ⑦周辺言語（話す速度、口調、アクセント、話の間の取り方）
  - ⑧時間のコンセプト（過去に重点を置く文化／現在・未来に重点を置く文化）
  - ⑨臭覚学
  - ⑩対物表現メッセージ（服装、化粧など）
- ⑥「視線接触学・アイコンタクト」は、目上の人と視線を合わせるのは失礼だとみなされている地域がある一方で、相手の目を見て話を聞くのが礼儀だと認識されている文化圏もあるということ。
- ⑧「時間のコンセプト」は2つに分類することができる。1つは「モノクロニック・タイム」。1つの時間には1つのことをするのが基本で、ドイツや北欧などに多い。もう1つの「ポリクロニック



### 分科会A（企画・立案）

分科会A参加者 村本 由香

- ・ 企画・立案過程で、楽しかった事例とストレスを感じた事例を紹介し、その要素を分析
- ・ 事業を成功させるためには、準備段階から目的・意義や役割を明確にし、必要な時間と資金を確保し、参加者と主催者が一体となることが必要
- ・ PDCA(Plan-Do-Check-Action)のサイクルを意識する
- ・ 事業を企画・立案するには、以下の要素を明確に
  - 1) 条件：対象者、人数、年齢層、予算、規模
  - 2) 背景：どのようなニーズがあるか
  - 3) 目的：企画をすることで、何を目指し、何を伝えたいのか
  - 4) 力量：運営可能な内容か（人材、資金、期間、組織体制等）
  - 5) 内容：具体的な内容（流れ、スケジュール、役割分担）
  - 6) 危機管理：起こりうるリスクの想定と対応



分科会A（企画・立案）で焼野講師から講評を聞く

ク・タイム」は1つの時間に複数のことを行うことが多く、ラテンアメリカによく見られ、人間関係を重視する傾向がある。例えば、A氏とB氏が15時から会う約束をしていたところ、A氏の友人C氏が突然A氏を訪ねてきたとする。A氏は、B氏と約束があるからといってC氏に早目に退場





### ③ 満月にいるのはだれ？

満月のクレーターの模様は何に見えるかと問われると、日本人なら「餅つきをしているウサギ」と答える。同じことをヨーロッパや北欧の人に訊くと「人の顔」と答える。



### ④ 子どもがイスをガタガタ揺する

日本にあるインターナショナル・スクールに勤務するアメリカ人の先生と日本人の先生に「子どもの振る舞いのうち、先生が一番イライラさせられるのはどんな行動か」と質問したことがあった。アメリカ人の先生も日本人の先生も「子どもがイスをガタガタ揺すること」と答えた。「なぜイライラさせられ

るのか」と再度尋ねたところ、アメリカ人の先生は「イスが壊れたり、子どもがケガをしたりすると困るから」と答えたが、日本人の先生は「イスを揺するなど子どものお行儀がよくないのは、自分の指導力が足りないせいだと感じるから」と述べた。

子どもたちの同じ振る舞いを見ても、先生の感じ方はこれだけ違っているのである。

### 物事のとらえ方

特定の物事を見て、それをどのようにとらえるかは、その人の価値観が関係している。個人を大切にしている価値観を持っているか、あるいは、人とのかかわり方によって、自分の役割が変わる相互依存の価

## 分科会C (異文化コミュニケーション)

### 「価値観」について考えるワークショップの一例

立原 公美子

#### ■ 目的

- ・ 国や民族に基づく価値観もあれば、国や世代を超えた共通のものもある。
- ・ 写真からある程度の価値観を推測することはできるが、本人に直接聞かなければ、本当の価値観はわからない。
- ・ 国際交流では、異文化に属する人々に実際に話を聞く機会があることに気づく。
- ・ 異文化コミュニケーションで大切なこと→ "make a friend!"

#### ■ 資料

「地球家族」ピーター・メンツェル著

- 1) 様々な国の家族が、自宅にあるすべての家具・物品を家の外に並べて撮影した写真
- 2) 様々な国の家族が、自宅にあるすべての食料品を家の前に並べて撮影した写真

#### ■ 方法

上述の写真を見て以下の点を話し合う

- 1) 彼らが何を大切にしているか



分科会C (異文化コミュニケーション) 写真を見て話し合う

- 2) 彼らにとってそれはどのような意味を持つか

#### ■ 気づき

- ・ 上述の写真では、日本と他国を比較すると日本の家族の所持品が圧倒的に多い。
- ・ 同じ言葉を聞いても、文化的背景によってイメージするものが違う。例えば、「誕生日に食べるものは？」と尋ねられて、韓国では「わかめスープ」をイメージする人が多いのに対し、日本ではケーキを思い浮かべることが多い。

## 第1回「国際交流リーダー養成セミナー」

価値観を持っているかによっても大きな違いがある。例えば、転職することをキャリアアップととらえるか、辛抱が足りないととらえるかでは見方がまったく逆である。

価値観はごく幼い頃から形成される。あるイン



交流会で自分の描いた絵を相手に見せて自己紹介する

ターナショナル・スクールで、子どもたちに「自分の家族の絵を描きましょう」と指示したことがあった。外国人の子どもたちはすぐに絵を描き始めたが、日本人の子どもたちは、周りの子どもを見回して、少し相談してから描き始めた。

このように子どもであっても、自分がどのように振舞うべきかを無意識のうちに身に付けていることがある。国際交流をする際には、状況にあわせて自分の価値観を調整していく必要がある。こうした価値観は世界に対する見方にも影響を与えている。

### まとめ

「異文化コミュニケーションを学ぶということは、他の文化に興味を持つことから始まり、そしてそれは最終的には自分の文化とは何かを考えるその繰り返しなのである」

引用：ピーター・アドラーの文献より

## 参加者の声

### 「4時間強の分科会でスキルを学び、4時間のグループ活動で『実行可能な』国際交流事業のプロジェクトを企画する」

分科会B（ファシリテーション）参加者 軽込 郁

知識吸収・情報交換のみならず、参加者同士刺激を与え合うよい機会だった。中立の立場で意見の相違を尊重しながら、議論を方向付けるのは難しい。分科会参加者は何らかの形でファシリテーション・リーダー経験者ではあるが、グループ活動では、アイデアも経験も豊富な別の分科会の参加者を相手にして、結論に導く前に議論が迷走することもあった。講師の的確な助言だけでなく、分科会参加者がお互い意見を出し合い、将来実施可能な企画の提案ができ、充実したセミナーとなった。講師の方々、20名の参加者全員に改めて感謝する。



分科会B（ファシリテーション）椿講師から説明を聞く





## チーム & ハート + ONE

日本青年国際交流機構会長 田中南欧子

さわやかな新緑の季節となりました。全国のIYEO会員の皆様、お元気ですか。

昨年度事業に参加した新入会員の方々も、各地で本格的に活動を始められていることと思います。この春新たに社会人となられた方、転勤で初めての土地で新しくスタートした方、故郷に帰って懐かしい環境で生活を始められた方、IYEOが御縁で新しく家庭を築かれた方もいらっしゃるかもしれませんね。

昨年度は「チームとハート」についていろいろな機会にお話ししましたが、今年にはさらに「チームとハート+ONE」で活動していきたいと思えます。組織で活動するのに不可欠なチームワーク。一人ではなかなか難しいことでも、チームでなら実現可能な事柄がたくさんあります。また、外国の方々とは交流するとき、ハートがなくては真の交流はできません。今年新たに加えた「+ONE」には、それぞれ自分の好きなことばを付け加え、一年間IYEOの活動をする際の自分自身の目標として下さい。そして積極的に活動の場を広げ、お互いにネットワークを結んでいきましょう。さらに、具体的に活動に取り組むにあたって、ぜひIYEOの活動方針を見直してください。

IYEOでは、「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」を基本方針に掲げ、「自国において、互いの持てる力を出し合い協力しながら住みやすい社会を創りあげると共に、世

界の各国がパートナーとして連携し協力し合える国際世界を創ろう」という考え方を基本にしながら、次の三つの柱を立てています。まず、個人としての視点から「相互理解を深めるための自己研鑽を図ろう」として、会員一人一人が自らを高める努力を呼びかけています。次に自分が基盤とする地域を活性化することに力を入れた「地域社会における国際交流活動を推進しよう」、そして、世界とのネットワークを生かして活動する視点から「歴史ある国際交流団体としての社会貢献活動に取り組もう」の三本です。

来年度で50年を迎える内閣府の青年国際交流事業ですが、青年たちをとりまく社会の状況は刻々と変化し続けています。そのような社会の中で、幅広い年齢層、様々な職業などの背景を持つ会員で構成されるIYEOはこれからも成長を続け、様々な視点から社会への貢献に取り組んでいくことのできる団体であると信じています。自分の住んでいる地域にしっかりと足をつけ、今年度も笑顔で実りのある活動をしていきたいと考えております。

皆さんは社会に貢献していく活動を展開するために、どのような「+ONE」を心に決めていかれるのでしょうか。私もIYEO会長としての「+ONE」を心に秘め今年度をスタートいたしました。

では、全国のみなさんの「チームとハート+ONE」で一緒に進んでいきましょう！

平成19年度日本青年国際交流機構役員

役職	氏名	役職	氏名	役職	氏名
会長	田中 南欧子	事務局 局長	野村 隆紹	顧問	寺下 英明
副会長	大橋 玲子	事務局 次長	本田 温子	◇	奥野 照義
◇	佐藤 周一	事務局 次長	白鳥 正信	◇	坂田 清一
◇	大河原 友子	国際担当 幹事	齋藤 珠恵	◇	大森 充
◇	上杉 聖次	PR担当 幹事	藤本 和子	◇	酒井 洋幸
◇	大久保 信一	PR担当 幹事	矢口 稔	参与	大谷 直義
ブロック 幹事	北海道・東北	組織担当 幹事	田中 佐代子	◇	三浦 博史
	関東	国際担当 幹事	市川 八千代	◇	中野 智昭
	北信越	役員	氏名	◇	田中 克宜
	東海	監査役	焼野 嘉津人		
	近畿	◇	椿 景子		
	中国				
	四国				
	九州				

平成19年3月4日～平成20年3月31日

### 日本青年国際交流機構 (IYEO) 活動方針

#### 「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」

1. 相互理解を深めるための自己研鑽を図ろう
2. 地域社会における国際交流活動を推進しよう
3. 歴史ある国際交流団体としての社会貢献活動に取り組もう

# 青少年国際交流事業事後活動推進全国代表者会議 (財)青少年国際交流推進センター推進委員会議 日本青年国際交流機構第45回全国推進会議

平成18年度第2回目の「青少年国際交流事業事後活動推進全国代表者会議」が平成19年3月3日(土)～3月4日(日)に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されました。



開会式で挨拶する田中南欧子会長

## 第1日目

### 開会式

1. 内閣府青年国際交流事業について
2. (財)青少年国際交流推進センター事業報告及び計画等
3. 議長及び議事録署名人の選出
4. 議事提案
5. 議事内容案(審議事項並びに報告事項)
  - 第1号議案 日本青年国際交流機構活動方針
  - 第2号議案 日本青年国際交流機構平成19年度活動計画(案)
  - 第3号議案 日本青年国際交流機構平成19年度予算(案)
  - 第4号議案 役員選任
  - 第5号議案 ブロック内交流費
  - 第6号議案 財政基盤について
  - 第7号議案 その他

### ブロック別懇談

## 第2日目

- 報告事項1 平成18年度下半期活動報告及び予定
- 報告事項2 平成18年度下半期都道府県活動報告並びにブロック大会報告及び平成19年度開催予定について
- 報告事項3 日本青年国際交流機構全国大会について
- 報告事項4 平成19年度IYEO表彰対象者について
- 報告事項5 その他(IYEOウェブサイト、IYEOパンフレット、SWYプロモーションビデオ、グローバル・フォト・コンテスト)

### テーマ別懇談会

1. 「東南アジア青年の船」事業「日本・ASEAN交流プログラム」実施によって、いかにIYEOの組織充実を図るか
2. ブロック大会の効果的な実施について
3. IYEOの独自活動について
4. IYEOの組織運営のあり方～幅広い年齢層を取り込んだ運営について～

### 閉会式



テーマ別懇談会(ブロック大会の効果的な実施について)



### 第9回「世界青年の船」 高木ひとみ

私たち第9回「世界青年の船」既参加青年は、2007年2月3日～4日の1泊2日、国立オリンピック記念青少年総合センターで「10周年記念同窓会」を開催しました。今回の同窓会を通して、私たちは「世界青年の船」のネットワークの素晴らしさを再確認することができたのと同時に、私たちにとって新たな旅を始める機会になりました。

3名のアドバイザー（北海道から小島先生、関東から手塚先生・梅木先生）と参加青年26名、計29名が集まり下船後10周年を祝いました。今回の同窓会のテーマは、「10年目の再出発!」ということで、プログラムを通して築いたネットワークの再構築を目指し、さらに今後の活動に繋げていくための場として企画しました。

1日目は、「10年目のRestart」と題して、懐かしい記録ビデオや音楽を鑑賞しながら、同窓会参加者間で再会を喜び合いながら、住所録の整備を行い、ネットワークの土台作りを行いました。懐かしいメンバーと再会すると、まるで10年前のエネルギーが沸き上がってくるようで、懇親会から二次会、三次会…!と盛り上がりました。懇親会では、参加者全員が下船後10年を振り返るスピーチをしながら、プレゼント交換などを行いました。景品にはにっぽん丸グッズなどもあり、「思い出」から「今」そして「これから」などを語り合いました。

2日目は私たちの「絆」について考えました。午前のセッション「Before & After」では、メーリングリスト運営方法、事業終了後から発行し続けているニュースレター「SONRISA」の継続方法、次回同窓会企画・運営



方法などについて話し合い、私たちの「絆」を次のアクションに繋げるためのアイデアを出し合いました。また、近い将来に、にっぽん丸で同窓会を行おう!という楽しい企画も出ました。最後のセッションとなる午後は「メモリアル・ロゴ作り」を行い、天野清美さんのアイデアを元に、にっぽん丸の中に「第9回『世界青年の船』の参加者全員」をみんなで描きこみました。ロゴの中の「SWY9th 1997」の後の「●→」のイメージは、1997年の熱いエネルギーが10年を経た今も続いていることを表しています。今回の同窓会では全員が集まることはできませんでしたが、心の中では世界各地にいる参加者と繋がっている想いを込めて、ロゴの中で「全員集合!」を表現しました。

私たちは今回の同窓会を通して、事業を通して出逢った仲間との間に生まれた友情の大切さを再確認し、まだまだ元気なエネルギーを分かち合うことができました。私たちが参加した国際交流事業の効果は、国際的視野や多文化理解やリーダーシップ力などの資質を身につけるだけでなく、参加後の日々の生活の中でエネルギーを分かち合い、日常の中で自分たちができることをしていく力を持ち続けることのできる宝のような仲間を生み出し、世界と人と心と文化をつなぐことであることを再発見しました。私たちはこれからも同窓会を開催しつづけて、「世界青年の船」のネットワークが持つエネルギーを更に力強いものにしていくことができたらと考えています。

## 「青少年国際交流を考える集い(ブロック大会)」

平成18年度「青少年国際交流を考える集い(ブロック大会)」報告

**関東ブロック** 平成18年10月28日(土)～29日(日) さわやかちば県民プラザ 大会実行委員長 塩塚 直邦

開会式に引き続き「ボランティアだからできること」と題して、千葉県柏市に拠点を置くNPO法人ASAC(カンボジアに学校を贈る会)代表者の岡村重紀氏、事務局長の渡辺成子氏による基調講演が行われました。ASACはこれまでにカンボジアで数十校を開校し、4万人近い子供たちが学んでいます。困難に直面しながらも懸命な努力によって現在も事業が継続されていることに感銘を受けました。

分科会では「私たちだからできること～国際交流活動経験を活かして」と題して、参加者が小グループに分かれて、自分の活動経験をもとにディスカッションを行いました。比較的少人数だったこともあり、和やかな

雰囲気の中で自由に意見交換ができました。

2日目は、平成17年度内閣府国際交流事業参加青年(「国際青年育成交流」(チュニジア、ミャンマー)、「日本・中国青年親善交流」、「日本・韓国青年親善交流」、「世界青年の船」)による帰国報告会が行われました。

今大会は現在の千葉県IYEOの役員による初めての企



画で、至らぬ点も数多くありましたが、御多忙にもかかわらず御参加、御協力いただいた皆様方に、実行委員一同厚く御礼申し上げます。

**九州・沖縄ブロック** 平成19年1月27日(土)～28日(日) 沖縄県青年会館 沖縄県青年国際交流機構 事務局長 田中 啓介

はるばる沖縄までお越しいただくのだから、国際交流の現場で実践できるヒントをおみやげにしてほしい。そんな思いで『おきなわ! おおきな! おっきな輪! ～2日間であなただが変わる～』をテーマに、コミュニケーションを軸としたプログラムを展開しました。打ち解けあいのゲームで出逢いの緊張を喜びに変えるヒントを体験した後、「漆喰シーサー作り」、「青年海外協力隊OBOGによる異文化コミュニケーション」、「市内散策」の分科会へ。夜は沖縄料理に舌鼓を打ちながら、三線ラ



イブで全員がカチャーシーを踊り、交流に琉球の花が咲きました。翌日は、田中

会長によるIYEOの事業紹介、福岡県IYEOメンバーによるSWYや事後活動の報告。来年度の開催県、鹿児島県に大会旗と熱い想いを託し、参加者はシーカヤックや南部戦跡めぐりなどのオプションツアーに出発しました。

沖縄県IYEOメンバーのうち、前回のブロック大会(8年前)を知る者はゼロ。試行錯誤の企画運営でしたが、蓋を開けてみれば総勢85名(うち県外参加者44名・外国参加青年8名)もの活気に溢れた2日間になりました。これまで関わりのなかった地元の国際交流協会や元気な高校生の参加もあり、沖縄県やJICA沖縄のご協力のおかげで、沖縄県IYEOに新しい力をいただきました。今大会を契機に、沖縄における国際交流に新しい潮流を生み出していきたいと思っております。皆様にふえーでーびたん(ありがとうございました)!

平成19年度 日本青年国際交流機構 第23回全国大会愛知大会

日時：平成19年12月1日(土)～2日(日)  
会場：調整中

**東海ブロック** 平成19年2月3日(土)～4日(日) スパーレSHOWA 岐阜県青年国際交流機構 副会長 河村 健太郎

今回のブロック大会のテーマは「餃子作り、太極拳を通じて中国の文化を楽しもう!」に設定しました。理由として、岐阜県IYEOは中国派遣団を数多く排出し、また土地柄からも中国に馴染みが深いからです。中国をテーマにいろいろと意見を出し合った結果、餃子作りと太極拳講習を同時に開催してしまおうという欲張りプランに決定しました。講演会には寺下英明氏を招き、「隣国中国から学ぼう～更なる日本の飛躍を目指して」をテーマに講演していただきました。餃子作り、太極拳講習も成功し、参加者も満足のうちにワークショップも終了。夜の懇親会の席上では、お互い体験していないワークショップに

ついて話し合い、大変盛り上がりました。



2日目の帰国報告会では、東海ブロック4県から選抜されたメンバーが各々の貴重な体験を非常にわかりやすく発表しました。

大会の総括としては、参加人員が多くなかったことが功を奏し、アットホームな大会となり、参加者からは感謝の言葉を多くいただきました。

**近畿ブロック** 平成19年2月3日(土)～4日(日) パレス神戸 兵庫県青年国際交流機構 事務局長 高谷 寛

「神戸と海外移民～国際交流から考える多文化共生の意味」というテーマで、地域での国際交流を推進することを目標に、ブロック大会を行いました。

講師の関西ブラジル人コミュニティ顧問の東連寺八郎氏による講演からは、かつて神戸から南米に旅立っていった移民の歴史と、現在日本に戻っている子孫のかかえる問題を知りました。分科会では、兵庫県在住の日系ブラジル人2世の方をむかえ、現状を詳しくお聞きして理解を深めることができました。「お金を使い、



海外で行う国際交流もいいですが、お金をかけずに、

多文化で育った人たちと立派な国際交流が地元でもできます」との言葉が心に残っています。

懇親会では、兵庫県で行われた国体のマスコットも登場し、ブロック大会という世代を越えた交流の場を楽しむことができました。

2日目は、帰国報告会にほとんどの時間を費やし、10名の参加青年がそれぞれの視点から報告をしました。午後は「旧神戸移住センター」を訪問し、当時の移民者が滞在していた施設の中で、その時の写真や、現地で使っていた農具などの展示を見、船内での生活の様子などを当時船内で働いていた方から聞くことができました。

今回の大会を通じ、今後、地域で国際理解、国際交流に取り組んでいくきっかけができました。また、これまであったIYEOの繋がりも、そして新しくできた繋がりも大切に、活動していきたいと思えます。

**平成19年度 青少年国際交流を考える集い(ブロック大会) 予定**

ブロック	開催県	開催日(案)	会場
北海道・東北	北海道	10月6～7日	調整中
関東	埼玉県	10月13～14日	ホテル三光(川越市)
北信越	新潟県	10月6～7日	調整中
近畿	京都府	8月18～19日	コミュニティ嵯峨野(京都市)
中国	島根県	9月1～2日	調整中
四国	徳島県	6月9～10日	神山温泉 ホテル四季の里&いやしの湯(名西郡)
九州	鹿児島県	平成20年 調整中	調整中

### 第10回青年の船30周年の集い



第10回「青年の船」(アメリカ・メキシコ訪問)の30周年のつどいを9月30日～10月1日、懐かしい晴海に近い「東京ベイ有明ワシントンホテル」にて開催。小野左千夫管理官、松下俱子副団長をはじめ総勢108名というたくさんの参加者がありました。

北は北海道、南は沖縄、遠くはアメリカ・ニューヨーク

### 「感動の日」再び！…

### 第10回「青年の船」30周年につどい

第10回「青年の船」30周年のつどい 実行委員長  
山内 眞弓

から集まり、下船後初めて30年ぶりに来た人、家族一緒の人も。でも、会えば30年前にアツという間に戻り、懐かしい呼び名が飛び交い、まさにあの時の船の中にいるかの様でした。あ

の頃のバイタリティーのまま、2次会、3次会に…と突入。有明の夜はなかなか更けません。

そして翌日、『35周年、40周年に向け元気で再会を！青年の船は不滅です』との言葉で散会となり、文化視察に向かう者、班別研修を続ける者、様々に自主研修に励み、いろんな想いを胸に故郷へと向かったのです。



### グローバル・フォト・コンテスト 写真パネルを貸し出しています



グローバル・フォト・コンテストの写真パネルをイベントなどで展示してみませんか。貸し出し可能なパネルは、第1回「食のある風景」、第2回「ストリート・マーケット」の2種類で、約30枚が1セットになっています。貸し出しを希望する方は、担当者名、担当者連絡先、使用するイベント名、使用期間と送付先を(財)青少年国際交流推進センター (tel:03-3249-0767)へお知らせください。



### 今月号の表紙 Flowers (「花」)

Joy Lim  
(Singapore, SSEAYP 29)



### 編集後記

新年度を迎え、マクロコズムも新しいデザインになりましたが、いかがでしたか?マクロコズムで使用している写真の大半は、一般の方が撮影したものです。皆さんが撮影した思い出の一枚がいつそう映えるような紙面構成を心がけていきます。(ふ)

## MACROCOSM 5月号 vol.76

2007年5月1日発行 (隔月発行)

編集 マクロコズム編集委員会

発行 (財)青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町

2-35-14 東京海苔会館6階

TEL: 03-3249-0767 FAX: 03-3639-2436

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: <http://www.centerye.org> (CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構 (IYEO)

定価 220円 (210円)

印刷所 株式会社デックス

TEL: 03-3400-8089 FAX: 03-5469-5270

since  
**1884**  
Pioneer Of  
Cruise



「クルーズイヤー2007」  
の公式スポンサーとして  
クルーズを盛り上げる  
イベント・キャンペーン  
に協賛しています。

目覚めれば、新しい朝。  
<http://www.cruise2007.jp>



にっぽん丸



23時45分起床。ここから  
船一番の実務家の今日が始まる。

にっぽん丸 二等航海士 上床 剛

深夜23時45分。枕もとの目覚まし時計が無情な音をたて、まだ夢の中にある彼をたたき起こす。二等航海士・上床剛にとつての新たな“今日”の始まりだ。上床いわく、二等航海士はにっぽん丸の“実務家”なのだという。午前0時から4時まで暗い海に目を凝らし、昼前からは甲板部のクルーと共に工務の仕事に従事する。さらに海図に向かい航路の作成を行うかたわら、クルーの労務管理に目を配りと…まさに彼の一日はフル回転。「いやもう、一日がホントに目まぐるしく過ぎて行きますね。二等航海士の毎日って、一人前の船乗りとして生きていく上での神が与えし“試練”なんじゃないかなと思うくらい多忙です」と話す上床。とはいえ、彼の表情はいつでも爽やか。苦勞の陰など微塵もない。「それはそうですよ。やはり客船の航海士というのは海を目指す者なら誰でも憧れるものです。その憧れの舞台に今こうして自分が立てているんだと思えばこの程度のことは苦勞じゃありません。そう言って夕陽に彩られた海図に顔を戻した上床。そんな彼の“今日”は間もなく終わる。甲板部の仲間と一杯やって、おそらく19時過ぎには再び夢の中だ…。

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅



夏の八丈島・新島クルーズ 東京→八丈島→新島→東京 2007年6月23日(土)～6月26日(火) <b>136,000円</b>	夏の屋久島・足摺クルーズ <b>神戸発着</b> 神戸→土佐清水→屋久島→神戸 2007年6月27日(水)～6月30日(土) <b>138,000円</b>	夏の日本探訪クルーズ ～中世の歴史と古代の自然～ 横浜→屋久島→平戸→(瀬戸内海)→大三島→新宮→横浜 2007年7月2日(月)～7月9日(月) <b>296,000円</b>
横浜/長崎クルーズ <b>横浜発・長崎着</b> 横浜→(瀬戸内海)→長崎 2007年7月9日(月)～7月11日(水) <b>64,000円</b>	博多/神戸/横浜クルーズ* <b>博多発・横浜着</b> 博多→神戸→横浜 2007年7月12日(木)～7月15日(日) <b>100,000円</b>	2008年世界一周クルーズ <b>横浜・神戸発着</b> 横浜・神戸発着(各101日間) 海外17カ国24港 2008年4月7日(月)～7月17日(木) <b>2,980,000円</b>

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大お一人様(全食事・イベント付)の旅行代金です。\*:各種のコースがございます。



商船三井客船

〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13  
三井ビル5F  
MOPASは商船三井客船の登録です。

お問い合わせは、各クルーズ取扱旅行会社  
またはMOPASクルーズデスクへ。

クルーズデスクフリーダイヤル  
0120-791-211

<http://www.mopas.co.jp>

The 50th Anniversary



TOPTOUR



人が行き、人が集う、それが旅。

東急観光株式会社は創立50周年を機にトップツアー株式会社として生まれ変わりました。

旅は人と人とのコミュニケーションの架け橋  
旅は人と自然が触れ合う地球の扉  
旅は人と歴史をつなぐ時空間のトンネル  
そんな旅を創造し、提案する[旅行インテリジェンス企業]  
それがトップツアー株式会社

東急観光は50年にわたる第一幕からトップツアーとして新たな第二幕のステージに立ちました。  
みなさまから愛される企業をめざして……



東急観光が社名を変えました。

トップツアー株式会社

国土交通大臣登録旅行業第38号 © 日本旅行業協会正会員・ポンド保証会員  
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号 <http://www.toptour.co.jp> <http://toptour.jp>

マクロコズム 2006年5月号 通巻七六号隔月発行 定価(本体二一〇円+税) 編集協力…

内閣府観光政策推進機構  
(共生社会政策推進担当)  
日本青年会議所国際連携機構